鶏肉

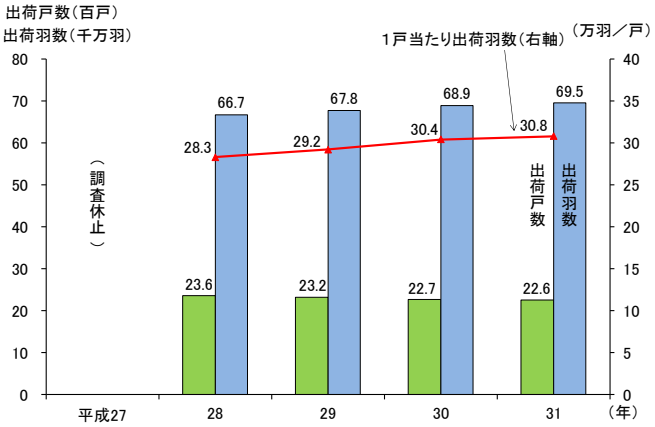
◆飼養動向

３１年のブロイラー出荷羽数、前年比０．９％増加

ブロイラーの飼養動向は、小規模農家の廃業や大規模層（年間出荷羽数５０万羽以上）のシェアの拡大を背景に、出荷戸数は減少傾向で推移する一方、出荷羽数は増加傾向で推移している。

平成３１年の出荷戸数は２２６０戸（前年比０．４％減）と前年をわずかに下回った。また、同年のブロイラーの出荷羽数は、６億９５３３万５０００羽（同０．９％増）と前年をわずかに上回った。この結果、１戸当たりの出荷羽数は３０万７７００羽（同１．４％増）と前年をわずかに上回った（図１）。

図１　ブロイラー出荷戸数および出荷羽数



資料：農林水産省「畜産統計」
注１：各年２月１日現在。なお、31 年は概算値。
　２：平成 27 年は世界農林業センサスの調査年のためデータなし。

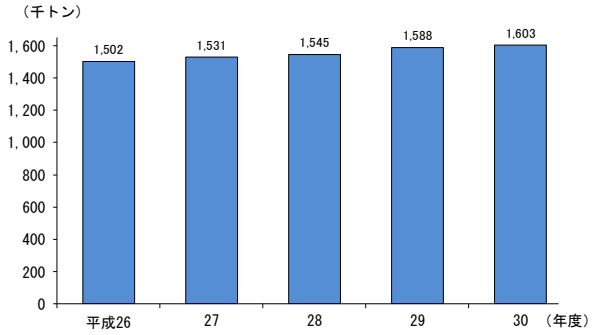
◆生　産

３０年度の鶏肉生産量、前年度比０．９％増加

鶏肉の生産量は、消費者の根強い国産志向や健康志向などを背景に、価格が堅調に推移したことなどにより、増加傾向で推移している。

平成３０年度は１６０万３２０６トン（前年度比０．９％増）と１６０万トンを超え、８年連続で過去最高を更新した（図２）。

図２　鶏肉の生産量



資料：農林水産省「食鳥流通統計」、「食料需給表」より農畜産業振興機構推計
注：骨付き肉ベース。

◆輸　入

３０年度の鶏肉輸入量、冷凍品は前年度比８．１％減少、鶏肉調整品は前年度比４．３％増加

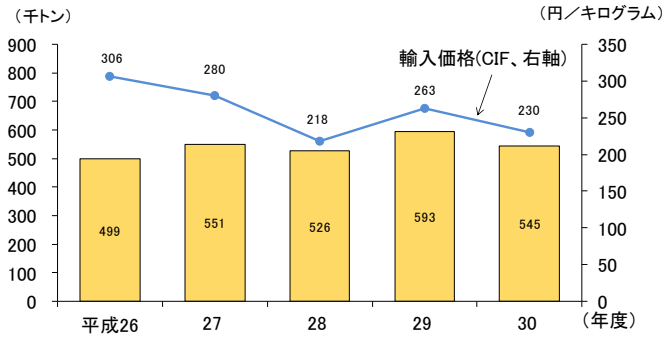
鶏肉

鶏肉の冷蔵品は消費期限が短いことから、輸入品の大半は主に加工・業務向けに利用される冷凍品である。

冷凍品の輸入量は、近年、加工・業務用向けの需要が高いことから、増加傾向で推移しており、平成２９年度に過去最高を記録した。

３０年度は、輸入品の在庫が積み上がっていたことなどにより、５４万４９１０トン（前年度比８．１％減）と前年度をかなりの程度下回ったものの、５０万トンを超える水準を維持している（図３）。

図３　鶏肉の輸入量および輸入価格



資料：財務省「貿易統計」
注１：実量ベース。
　２：生鮮、冷蔵品を除く。

冷凍品の輸入量を国別に見ると、ブラジルが全体の約７割を占める最大の供給国であり、タイ、米国がそれに続く。

ブラジルからの輸入量は、増減を繰り返しながらもおおむね増加傾向で推移している。

３０年度は、ブラジルで発生した運送関係者のストライキの影響などにより、３９万４４９０トン（同９．２％減）と過去最高を記録した前年度をかなりの程度下回った。

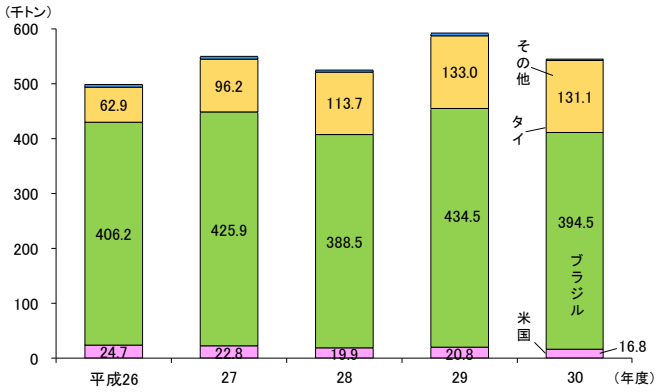
タイからの輸入量は、好調な輸出需要を背景に現地生産者の増産意欲が高まったことから、増加傾向で推移している。

３０年度は、増加傾向で推移していたものの、秋以降、タイ産鶏肉への中国からの引き合いが強まったことなどから１３万１１３９トン（同１．４％減）と過去最高を記録した前年度をわずかに下回った。

米国からの輸入量は、クリスマス需要向けなどの骨付きもも肉が多くを占めている。

３０年度は、米国産の一部をタイの調製品で手当てする動きがあったことなどから、１万６７６８トン（同１９．６％減）と前年度を大幅に下回った（図４）。

図４　鶏肉の国別輸入量



資料：財務省「貿易統計」
注：実量ベース。

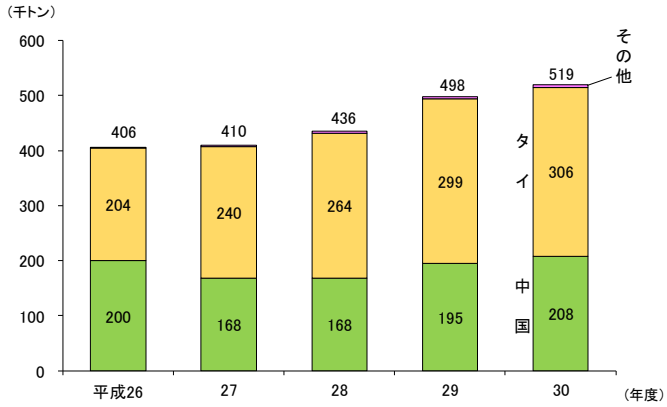
鶏肉調製品

鶏肉調製品（加熱処理や衣付け、調味した鶏肉など）の輸入量は、近年、食の外部化（外食、中食など）の進展や主要輸入相手国における高病原性鳥インフルエンザの発生による鶏肉輸出停止からの調製品への切替えなどを背景に、増加傾向で推移している。主な輸入先国は、加熱処理施設が多数存在するタイおよび中国となっているが、平成２５年の中国の「消費期限切れ鶏肉問題」以降、タイ産の割合が大きくなっている。また、近年は、日本国内の鶏肉調製品の需要拡大に伴い、両国からの輸入量がさらに増加している。

平成３０年度は５１万９０９７トン（前年度比４．３％増）と５０万トンを超え、４年連続で過去最高を記録した（図５）。

３０年度の鶏肉調製品の輸入量を国別に見ると、タイは３０万６３２８トン（同２．４％増）と４年連続で過去最高を記録した。中国は２０万８３９４トン（同６．７％増）と３年連続で前年度を上回った。

図５　鶏肉調製品の国別輸入量



資料：財務省「貿易統計」
注：1602-32-290（基本関税率８．０％、但し、WTO 加盟国（中国）は６．０％、EPA 締結国（タイ）は３．０％）。

◆消　費

３０年度の推定出回り量は前年度比１．５％増加、家計消費量は前年度比４．８％増加

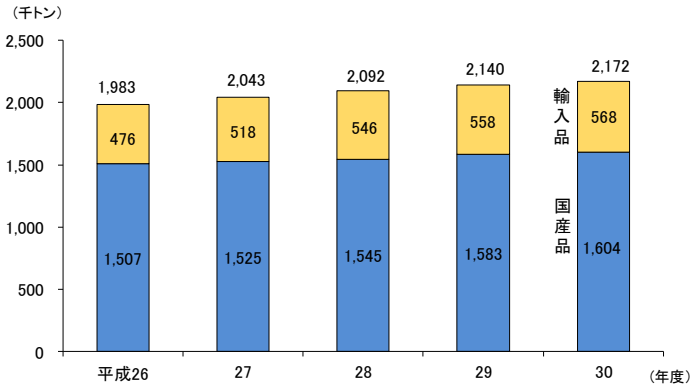
鶏肉の推定出回り量は、近年、消費者の健康志向などを背景に、増加傾向で推移している。

全体の約４分の３を占める国産品は、国産品が大半を占めている家計消費が好調なことから、増加傾向で推移しており、平成３０年度は１６０万３９８３トン（前年度比１．３％増）と１６０万トンを超え、８年連続で過去最高を記録した。

主に加工・業務用に利用されている輸入品は、外食や中食需要の高まりにより、増加傾向となっており、３０年度は５６万８３５６トン（同１．９％増）と、６年連続で過去最高を記録した。

この結果、３０年度は２１７万２３３９トン（同１．５％増）と４年連続で２００万トンを超え、１４年連続で過去最高を記録した（図６）。

図６　鶏肉の推定出回り量



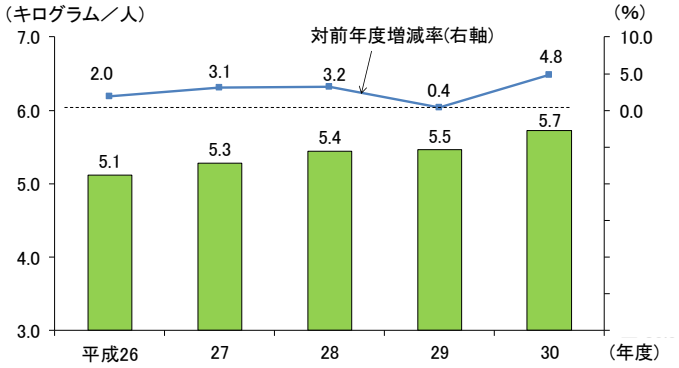
資料：農林水産省「食鳥流通統計」、財務省「貿易統計」より農畜産業振興機構で推計
注：実量ベース。

家計消費

鶏肉消費量の約４割を占める家計消費量は、消費者の健康志向を反映し、おおむね増加傾向で推移している。

平成３０年度は年間１人当たり５．７キログラム（前年度比４．８％増）と前年度をやや上回り、８年連続で過去最高を記録した。（図７）。

図７　鶏肉の家計消費量（年間１人当たり）



資料：総務省「家計調査報告」

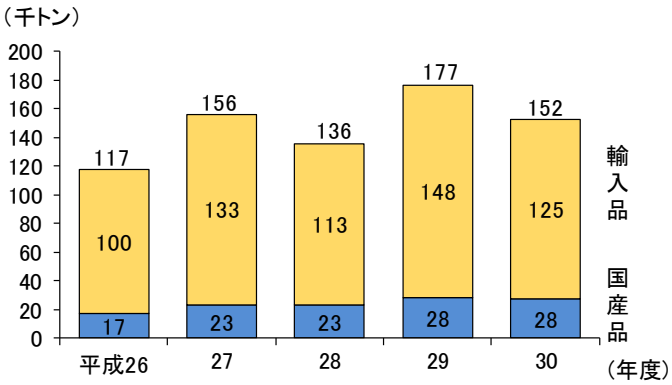
◆在庫

３０年度の推定期末在庫量、前年度比１３．７％減少

鶏肉の推定期末在庫量は、その８割以上を輸入品が占めることから、輸入量の動向に大きく左右される。平成２９年度は、近年の国産鶏肉生産量の増加やブラジルからの輸入量増加に伴い、過去最高の在庫水準となった。

３０年度は、前年度に積み上がった在庫を調整する動きなどにより、１５万２３２９トン（前年度比１３．７％減）と前年度をかなり大きく下回った（図８）。

図８　鶏肉の推定期末在庫量



資料：農畜産業振興機構調べ
注：四捨五入の関係で、合計値は必ずしも一致しない。

◆卸売価格

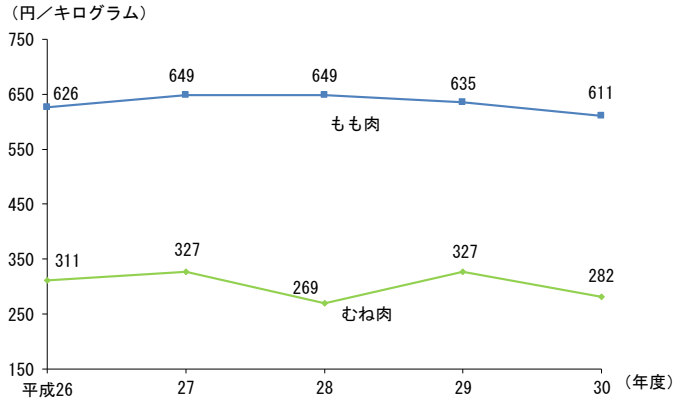
３０年度の鶏肉卸売価格、もも肉は前年度比３．９％安、むね肉は前年度比１３．８％安

国産鶏肉の卸売価格（ブロイラー卸売価格・東京）は、日本では、「もも肉」に対する消費者の嗜好が高いことから、価格水準が「むね肉」に比べて２～３倍高くなっている。

主にテーブルミートに仕向けられる「もも肉」は、国内の生産拡大により、需要を上回る供給が続いたことなどから、平成３０年度は１キログラム当たり６１１円（前年度比３．９％安）と前年度をやや下回った。

総菜やチキンナゲット、ソーセージなど主に加工・業務用利用の多い「むね肉」は、サラダチキンブームを中心に引き合いが強まっていたものの、国内の生産拡大により、需要を上回る供給が続いたことなどから、３０年度は同２８２円（同１３．８％安）と前年度をかなり大きく下回った。（図９）。

図９　国産鶏肉の卸売価格



資料：農林水産省「食鳥市況情報」
注：消費税を含まない。

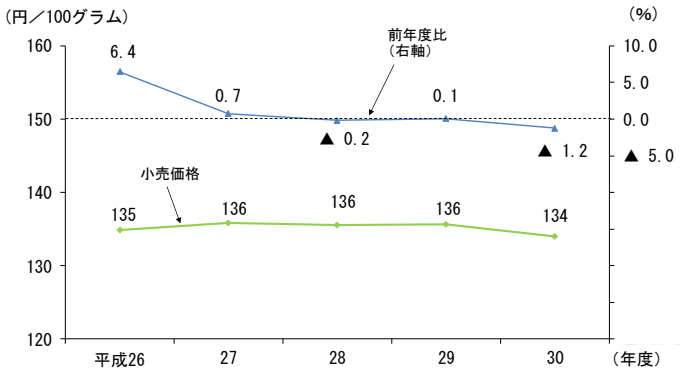
◆小売価格

３０年度の小売価格（もも肉）、前年度比１．２％低下

鶏肉の小売価格（もも肉・東京）は、消費者の健康志向や他の食肉に対する価格優位性に支えられた好調な需要を反映し、近年は、１００グラム当たり１３５円前後を安定的に推移している。

平成３０年度は同１３４円（前年度比１．２％安）と、前年度をわずかに下回った（図１０）。

図１０　鶏肉の小売価格（もも肉・東京）



資料：総務省「小売物価統計調査報告」
注：消費税を含む。税率は平成 26 年 4 月 1 日から 8%、それ以前は 5%。